

大阪大学大学院生命機能研究科

第8回 学生主催若手合宿研究交流会

報告書

第八回学生主催若手合宿委員会

1. 本合宿について

<合宿の目的>

生命機能研究科は、複雑な生命現象の原理と機構を解明するために、生命科学の既存の学問領域に留まらない融合研究の発展を理念として掲げている。その目的を推進するため、本研究科では異なる研究分野の学生やポスドク・助教などの若手研究者が交流できる場として、合宿形式の交流会を毎年開催している。また、学生や若手研究者のグローバル化を促進し、将来的に世界で活躍できる人材を育成するために、海外からの参加者も募ることで、国際色豊かな会へと回を重ねるごとに変化してきている。

第8回となる今回の合宿では、「Communication!~Beginning of Everything ~」をテーマとして掲げた。人間社会における物事の成り立ちは、人と人とが交わることで始まる。それは研究においても例外ではなく、融合研究の始まりも研究者同士の交流である。そのため、今回は原点回帰という点も含め、最も基本的ではあるが、尚且つ、最も重要である、「交流」に重点を置いて合宿の企画・運営を行った。今回の合宿の参加者達が、この機会を足掛かりとして、近い将来、異分野融合を展開し、先進的な研究を担うことができれば幸いである。

<合宿の概要>

本合宿は生命機能研究科の学生が中心となり、企画・運営のほぼ全てを取り仕切っている。また、前年から基礎工学研究科、情報科学研究科の募集も行ったことから、今年の運営委員では、これらの研究科の学生も若干名参与している。今回の第8回学生主催若手合宿研究交流会は、7月9日(水)から11日(金)までの3日間、京都で開催した。今年の参加者は73名であり、そのうち海外から招聘した参加者は13名で、留学生も含めると外国人参加者は26名であり、全体の3割にも上った。また、外国人参加者の国籍も17ヶ国にわたり、研究分野もさることながら、多様な文化を併せ持った人々の参加が幸運にも叶うことができた。

合宿の構成は、ポスターセッション、グループディスカッション、特別講演、エクスカージョンの4つセッションと、例年と同様ではあるが、例年以上に異分野や異文化の交流ができる工夫を随所に凝らした。ポスターセッションでは通常行われている学会形式に加え、より異分野交流を促進するためにポスターツアーを導入した。グループディスカッションでは、諸外国の異文化や、それを基にした考え方に触れることができるように、科学的なトピックの他に一般的で哲学的なテーマも加えた。特別講演では先生方の魅力的な研究内容の話に加え、研究者としてのこれまでの経験も語って頂いた。エクスカージョンは残念ながら、会の期間中に台風が接近していたため、参加者の安全を考慮し、こちらが用意していたプログラムは取り止め、代わりに自由時間とした。そのため今回の報告では、エクスカージョンの報告は除いてある。

英山 明慶 (岡本研 D3/5 : 文責)

2. ポスターツアー

<担当者>

澤田 莉沙 (近藤研 D2/5)

李 楽施 (名田研 D2/5)



<目的>

様々な分野の研究に触れることが主な目的である。発表者は他分野のメンバーに自分の研究意義がわかるように発表できるようになること、聞く側は専門外研究の基礎知識を習得することが望まれた。また、ポスターセッションの事前準備として専門外の研究をするために基礎知識を知ること目的の一つである。

<内容>

ポスターセッションの時間が足りないという以前の意見から、確実により多くの分野の研究を知ることができるように、今年からポスターツアーセッションを設けた。ポスターツアーは、異なる研究分野メンバーで構成されたグループで構成され、メンバーのポスターを15分単位で順番に回っていき、研究発表とそれに関するディスカッションを行うというものである。グループは意図的に研究分野が異なるように分け、発表者が研究内容よりもその分野の基礎知識を詳しく説明するように、そして、聞き手に回る時は、発表者の分野では当たり前すぎて普段聞けないような基本的なところから、遠慮せずに質問するように進めた

<結果・考察>

アンケートの結果、「満足」「やや満足」を選択した参加者は全体の67%、「どちらとも言えない」が25%、「やや不満」「不満」が8%だった。「異なる分野の人のポスター発表を聞く機会があつて、よかった」「ポスターセッションの良い準備になった」などの評価が得られたが、グループによって、「時間が長すぎる」と「時間が足りない」という正反対な意見があつた。それは、発表者の発表内容（豊富さ）と発表の仕方に左右されると考えられる。

<反省点・改善点>

各グループ内の発表順番を決める時に、ポスターパネルの配置を十分に考慮できなかった。そのため、決まった発表時間中にまったく人のいない通路と人が多すぎて入らないエリアがあつた。今後はその改善策として、パネルの左右だけでなく、前後とその各通路の広さを十分に考慮することがあげられる。

ポスターセッション

<担当者>

澤田 莉沙 (近藤研 D2/5)

李 楽施 (名田研 D2/5)



<目的>

ポスターセッションは、学会等でみられるような形式で行うことで、より自身の研究発表の練習となるよう考慮した。そこで、ディスカッションを通じて参加者が自分の研究についてフィードバックを得ることと、他の参加者の発表を聞くことで異なる分野の研究への理解を深めることが目的である。

<内容>

参加者が3グループに分かれて、1グループあたりに50分の発表時間を与えた。各セッションが始まる前に、30程度のショートトークの時間を設けた。そこで、発表者は自己紹介をはじめ、自分の研究テーマ（ポスター）をアピールしてもらった。すべてのポスターセッション終了後、2日目の夜までにベストポスターを3枚選んで投票してもらい、閉会式にてポスター賞（1位～3位）の表彰を行った。

<結果・考察>

アンケートの結果、「満足」「やや満足」を選択した参加者は全体の68%、「どちらとも言えない」が14%、「やや不満」「不満」が18%だった。そして、アンケートの中にセッション時間の長さについてのコメントがほとんどで、「時間が足りない」という意見が多かった。

<反省点・改善点>

アンケートの結果により、ポスターセッションの発表時間を長くすべきことが示されているが、他のプログラムとの兼ね合いで実現することが難しいと考えられる。そこで、解決策としてポスターの提示時間を長くすることと、発表時間が足りない可能性を初日に伝え、休憩時間と懇親会の時間も利用するように呼びかけることがあげられる。

3. グループディスカッション

<担当者>

横田 将志 (柳田研 D2/D5: 文責)

垣塚 太志 (柳田研 D2/D5)

<背景・目的>

本年度のグループディスカッションは、議論のテーマを決めることではなく議論自体に集中をしてもらうことを目標におき実施をした。事前に興味のあるテーマを調査するとともに運営側である程度流れを作ることにより、グループ内での議論が活発化するように工夫をした。

<方法>

本年度は事前に企画班の方でディスカッションのテーマを5つ決めておき、どのテーマに興味があるのかをアンケートで調査を行った。ここで得た結果と参加者の情報をもとに、所属研究室、学年、英語力を考慮しながら参加者を4つのテーマ各3グループに分配した。また各チーム1人は海外からの参加者と合宿委員が入るように注意をした。4つのテーマは「これからの科学はどう発展していく?」、「そもそも科学とは何だろう。」「私たち人間っていったい何者?」、「生きているとあたりまえに生じる感情。でもこれっていったいなに?」である。

ディスカッションはまず話し合うことを明確にするためにブレインストーミングから始めた。それぞれのグループに1つホワイトボードを用意し付箋紙にアイデアを書きホワイトボード上の模造紙に貼るという方法でブレインストーミングを行った。それぞれのグループで話しあうポイントを明確にすることによって英語の苦手な人でも喋りやすいように工夫をした。その後、そのテーマについて話し合った後、途中経過を中間発表で同じテーマの3つのグループでシェアをした後、最終発表に向け議論を進めた。

最終発表は最終日に行った。最終日の朝のグループディスカッションセッションでスライドをまとめてもらい、それを使って発表を行った。最終発表では発表と質疑応答を行い、もっとも納得させられたグループともっとも発見のあったグループを投票によって決定し、表彰した。ディスカッションには合宿3日間総計で5時間半が、最終日の発表には3時間が割り当てられた。



<結果>

ブレインストーミングを導入として使ったことにより多くのグループが何をしたいのかかわからないという状況に陥ることはなかった。また、中間発表を設けることにより時間の使い方にメリハリが生まれ有意義に議論が行われていたように思われる。

グループ分けにより各グループに1人ないしは2人の海外からの参加者が配置されており議論の中心となっていた。日本人の参加者は英語に長けたものを先頭に議論に参加をしていた。

今回のグループディスカッションではポイントを絞ることによって議論をしやすくしようとしていたのだが、テーマを絞りすぎたことにより時間が余ってしまったと感じる参加者もいた。一方ではテーマを具体的なものにできず議論に困ったグループもあったようである。

アンケートの結果としては満足とやや満足が合わせて約5割と少し不本意な結果であった。回答に添えられたコメントでは「ブレインストーミングでディスカッションの進め方を示してくれたのが良かった。」というものがあつた一方その反対意見もあり賛否両論といった感じであった。また、英語力に関するコメントも多く寄せられ、英語を向上させようと思う良いきっかけになったのではないかと感じられる。

<考察>

今回のグループディスカッションではブレインストーミングと中間発表という少し挑戦的なものを取り入れたが、この点についてはある程度成功したのではないかと考えている。特にブレインストーミングでは全員が意見を出すことができおり、議論に参加することができていた。しかし、テーマの設定ではもっと話しやすいものを用意できれば議論が止まるグループがなかったのではないかと思う。

また、海外の参加者からのコメントでいくつか寄せられたのが、日本人がシャイで話してくれなかったというものである。グループ分けの時に今回参考にしたのはコミュニケーションに関するものはTOEICの点数であり性格を考慮することはできなかった。そのため、グループ分けの良い方法を更に追求するよりは重要であると思うとともに、日本人の参加者は完璧な英語でなくとも良いので積極的にしゃべるということをこの合宿で練習してもらいたいと思う。

スライドと発表原稿を作るのが大変だったとのコメントもあつた。今回、最終日のグループディスカッションの1時間半を発表準備にあてていたのだが、多くのグループがその時間内に準備を終わらすことができていなかった。そのため、特別講演に入る際少し準備が遅れてしまった。もう少し時間管理をうまく出来る工夫があればよかったように思う。

このように反省もあるのだが、ディスカッションは楽しく有意義に進めることができた。自分の英語力を確認する良い機会にもなったと思う。今回の経験を今後の研究活動でも活かして行ってほしいと思う。

4. 特別講演

<担当者>

日浅 夏希 (清水研 D2/D5 : 文責)

垣塚 太志 (渡邊研 D2/D5)

<目的>

本企画は特別講演1・2と、Q&Aセッションの三部構成で行われた。

特別講演1とQ&Aセッションは、米・ワシントン大学でクロマチン研究に取り組んでおられる築山 俊夫先生にお願いした。特別講演では、クロマチン研究を始めるに至ったきっかけや、その後の研究の発展についてのお話を伺った。Q&Aセッションは自由参加で行い、アメリカで研究者として活躍するために必要なプロセスについて、Q&A形式で具体的にお話しいただいた。

特別講演2では、極限環境に生育する生物を対象に幅広く活動されている、広島大学の長沼 毅先生にお願いした。講演では地球上の様々な極限生物の生活や、地球外生命についての考察をお話しいただいた。

<実施内容>

特別講演1 / Q&A セッション

日時：7/10(木) 11:00~12:30

講演者：築山 俊夫

Affiliate Professor, Department of Biochemistry,

University of Washington, Seattle

演題：「クロマチン制御のメカニズムと機能の研究に関する個人的歴史」

(英題：My personal history of research on mechanisms

and functions of chromatin regulation)



特別講演2

日時：7/11(金) 11:00~12:30

講演者：長沼 毅

Visiting Researcher, Graduate School of Biosphere Science,

Hiroshima University

National Institute of Polar Research, Japan

演題：「地球外生命の可能性ーアストロバイオロジー的試論」

(英題：An astrobiological essay on extraterrestrial life)



<実施結果>

特別講演1

築山先生の研究生生活において、これまでどのような研究をしてきたか、自身の研究室での研究テーマの変遷、クロマチン研究を始めるに至った理由などを、専門的な内容を交えながらお話しいただいた。また、アメリカでポスドクとして研究する際の研究室の選び方等に触れ、日本との違いにも言及された。

アンケートの「満足」「やや満足」を合わせた割合は 71%と高く、「海外の研究生生活を知る良い機会になった」「クロマチン研究についての理解が深まった」等の声が聞かれた。一方「どちらとも言えない」という回答が 26%となり、「専門外で難しい内容だった」という感想が多く見受けられた。

Q&A セッション

このセッションは、先生と学生が自由に対話する形式で、希望者のみに対して行われた。内容はアメリカの大学院の仕組みやポスドクへの応募方法など、先生自身の経験を踏まえた非常に具体的なものであった。

アンケートの「満足」「やや満足」を合わせた割合は 86%と非常に高く、「アメリカでの具体的な研究の進め方について、とても参考になった」との感想が多く聞かれ、海外の研究生生活について知る非常に良い機会になったと思われる。

特別講演 2

長沼先生がこれまで関わってこられた極地・辺境等の過酷環境に生存する生物の探索調査に基づき、変わった生態を持つ生物の紹介や、地球外生命の仕組みとして考えられることについて、分野外の学生にも分かりやすい構成で話していただいた。合宿の参加者にとっては普段関わるのが少ない内容であり、研究の視野を広げる機会にもなったと考える。

アンケートでは「満足」「やや満足」を合わせた割合は 57%となり、「地球外生命体の可能性という内容が刺激的だった」「分野外でも興味を持てる内容だった」等の感想が聞かれた。一方「どちらとも言えない」「やや不満」を合わせると 41%となり、「全くの異分野であり理解が追い付かなかった」「分野外のため英語で聞くのに苦労した」といった感想が多く見受けられた。

<考察>

築山先生は、特別講演とセッション以外にも滞在中のプログラム全編に参加していただくことができ、学生も積極的にコミュニケーションを取ることができたため、参加者の合宿への満足度を大きく上げることができたと考えている。講演、セッションでは海外で研究者としてのキャリアを形成する上で重要なことについて様々な方面からお話しいただいたため、多くの参加者にとって非常に参考になったと思われる。

一方、特別講演では共に「分野が大きく異なり、英語のため分かりにくかった」との意見が聞かれた。参加者の研究分野は多岐に渡るため、事前に講演内容を把握すると共に、

専門性の高すぎる内容を避けた内容にする方が多くの参加者に興味を持ってもらえるだろう。英語力についてもばらつきがあるため、“少しゆっくり話していただく”、“資料に日本語を併記していただく”等の協力を、可能であればお願いしたいと思う。

また今回は公演時間を 90 分としたが、どちらの講演についても「時間が長すぎる」との指摘が見られたため、途中で休憩時間を設ける、講演を 60 分とし質疑応答に 30 分を設けておく等の対応が必要である。特に長沼先生の講演は最終日で、参加者の疲労も影響していたと考えられ、講演日程をできるだけ早めて実施することも検討したい。

5. 総括

今回の交流合宿が有意義なものだったかどうかは、将来的に参加者達がここで形成したネットワークを最大限に利用し、融合研究などを成し遂げた時に判断できるものである。そのため、この合宿の真価が問われるのは、近くても5年後、10年後のことであろう。よって、現時点での合宿の評価は、参加者達の満足度で判断したいと思う。結果として、アンケートでは8割の人から「満足」「やや満足」の評価を頂いたので、概ね成功したと言え、今後もこの合宿を継続して行うことは重要であると考え。しかしながら、合宿のクオリティをより上げるために、一点の改善点が挙げられる。

例年の課題ではあるが、日本人参加者における上位の学年の参加率が非常に低い。今年は海外から13名の参加者がいたが、そのほとんどが博士課程(D3/5)の学生であった。それに対し、日本人参加者57名の内、D3/5の参加者はわずかに5人だけである。そのため、ポスターセッションなどでより専門的なディスカッションを期待していた外国人参加者にとっては、物足り無いものとなってしまった。これは合宿全体の専門性にも直結する問題でもある。今後、博士課程(D3/5)の参加者を増やすためには、会の抜本的改変が必要であると私は考える。D3/5以上の方は過去に合宿に参加した人が多く、その時よりも会が自身にとって有用であると感じなければ、参加を決断するのは難しいかと思われる。よって、その人たちが国際学会などで発表する際の練習になるような、オーラル発表をプログラムに導入することが一つの解決策になり得ると考える。そして、この専門性の高いプログラムを成功させるためには、ポスドク・助教レベルの参加者も自然と必須になってくる。そのためには、運営や広報活動を今以上に力を注いで行う必要があり、先生方への呼びかけも大事になってくる。

近年、非常に国際色豊かな会へと変貌を遂げており、学生や若手研究者のグローバル化を促進するという目的を達しつつある。次の段階として、研究科内の博士課程(D3/5以上)の参加を促すことで、研究科の横の繋がりだけでなく、縦の繋がりも強固なものになり、合宿におけるネットワーク形成はほぼ完璧なものになるだろう。来年の合宿では是非ともこれを実現してくれると期待している。

英山 明慶 (岡本研 D3/5 : 文責)

< 第六回学生主催若手合宿研究交流会実行委員紹介 >

名前	担当	学年	研究室
英山 明慶	実行委員長	D3/5	岡本研
澤田 莉沙	企画	D2/5	近藤研
垣塚 太志	企画	D2/5	渡邊研
李 樂施	企画	D2/5	名田研
Brown Zuben Patrick	企画	D2/5	高木研
日浅 夏希	企画	M2	清水研(情報学研究科)
横田 将志	企画	D2/5	藤田研
酒井 智史	企画	D2/5	倉光研
西村 徹	広報	D3/5	仲野研
中村 達哉	広報	M2	西尾研(情報学研究科)
荒川 達彦	会計	D3/5	仲野研
石井 智佳	会計	D2/5	仲野研
青井 啓太	エクスカージョン	D2/5	石井(優)研

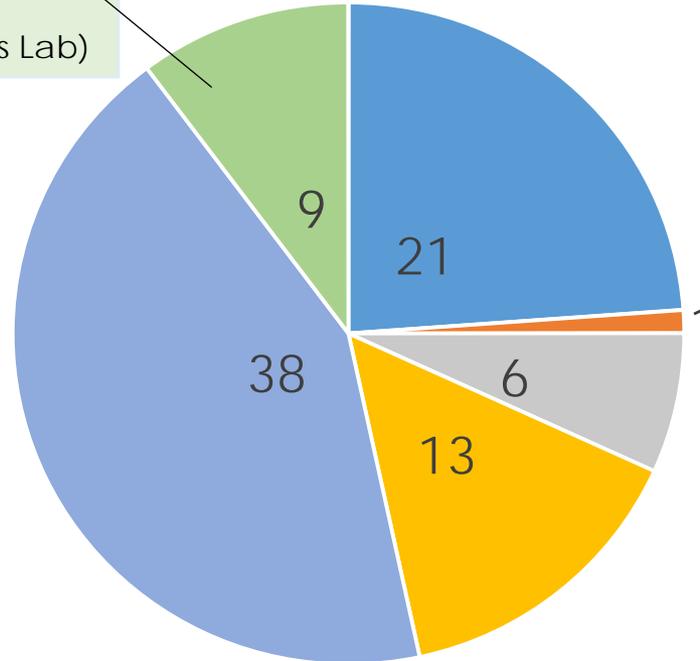
< 謝辞 >

本合宿は、リーディング大学院ヒューマンウェアプログラムと共に生命機能研究科の支援のもと開催されました。このような機会を与えて下さった難波先生、研究科長の仲野先生、また多くの海外研究者の招聘に協力して下さった先生方、田中さんを始め企画室の方々、そして合宿の開催に尽力して下さった皆様に深く感謝致します。

Q1. 今回の合宿を何で知りましたか？ (複数回答可)

その他

- 去年の研究交流会（8月）
- ガイダンス
- Professor / supervisor
- Introduced by professor
- By the lab members (Kondo's Lab)

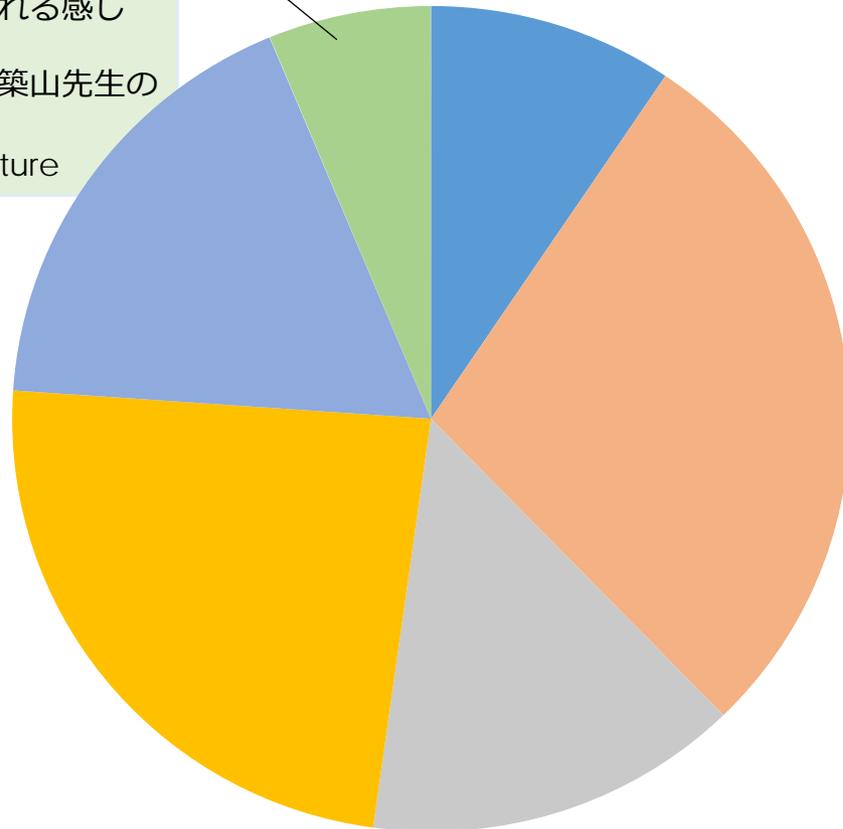


■ メール ■ HP ■ ポスター ■ 友人から ■ 合宿委員から ■ その他

Q2. 合宿に参加した目的は何ですか？ (複数回答可)

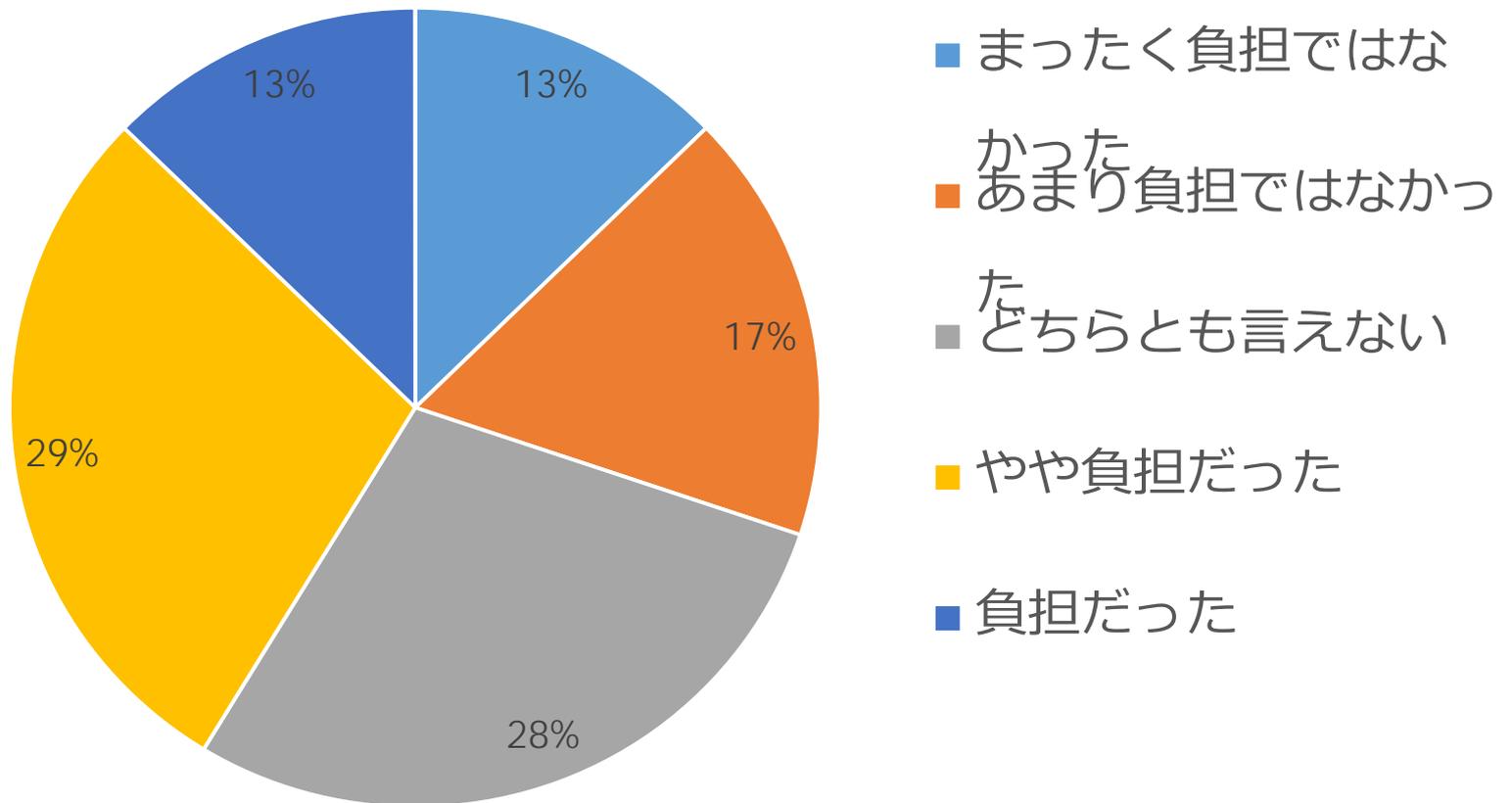
その他

- 1度くらい参加しておこうと思った
- 他の研究室の人の研究に対する考え方を知りたかった。
- お金の負担が少なめで泊まれる感じやったので
- 海外の人と交流するため。築山先生の講演を聴くため
- To see Japan and it's culture

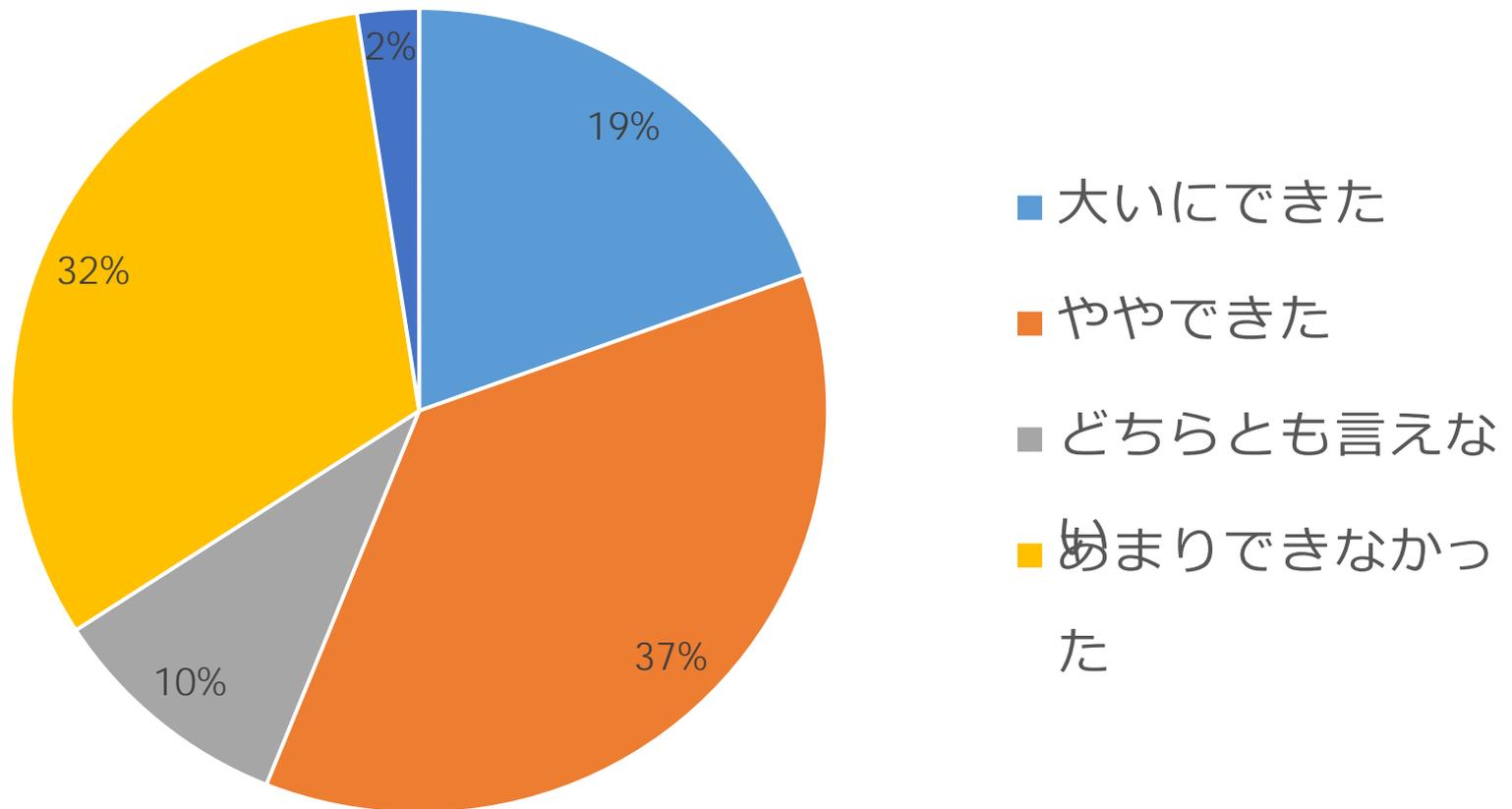


- 融合研究につながる情報交換を行うため
- 異分野の人と交流するため
- 研究発表の練習を行うため
- 英語の練習を行うため
- 友人を増やすため
- その他

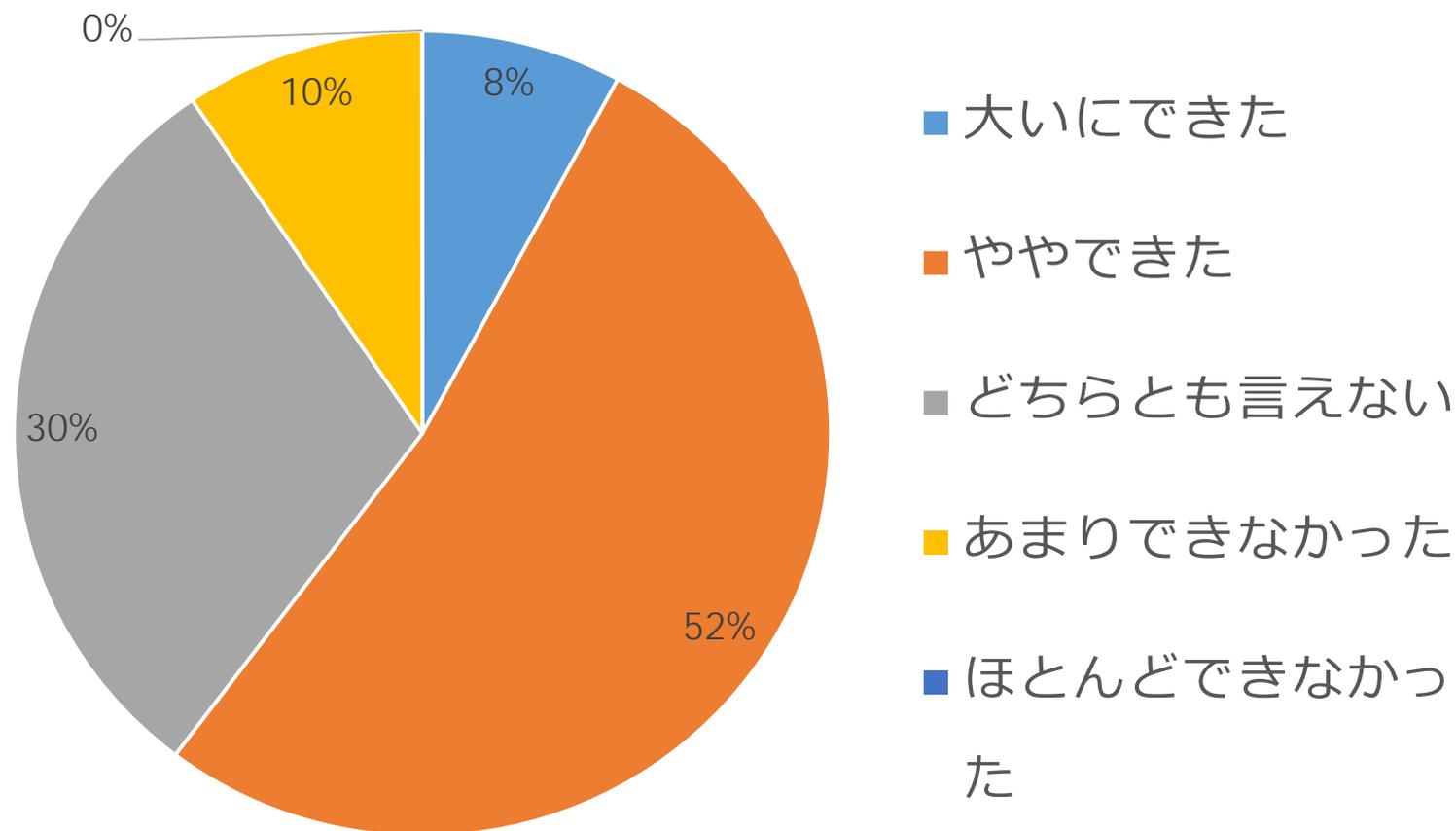
Q3. ポスターなどの発表資料の準備は負担ではありませんでしたか？



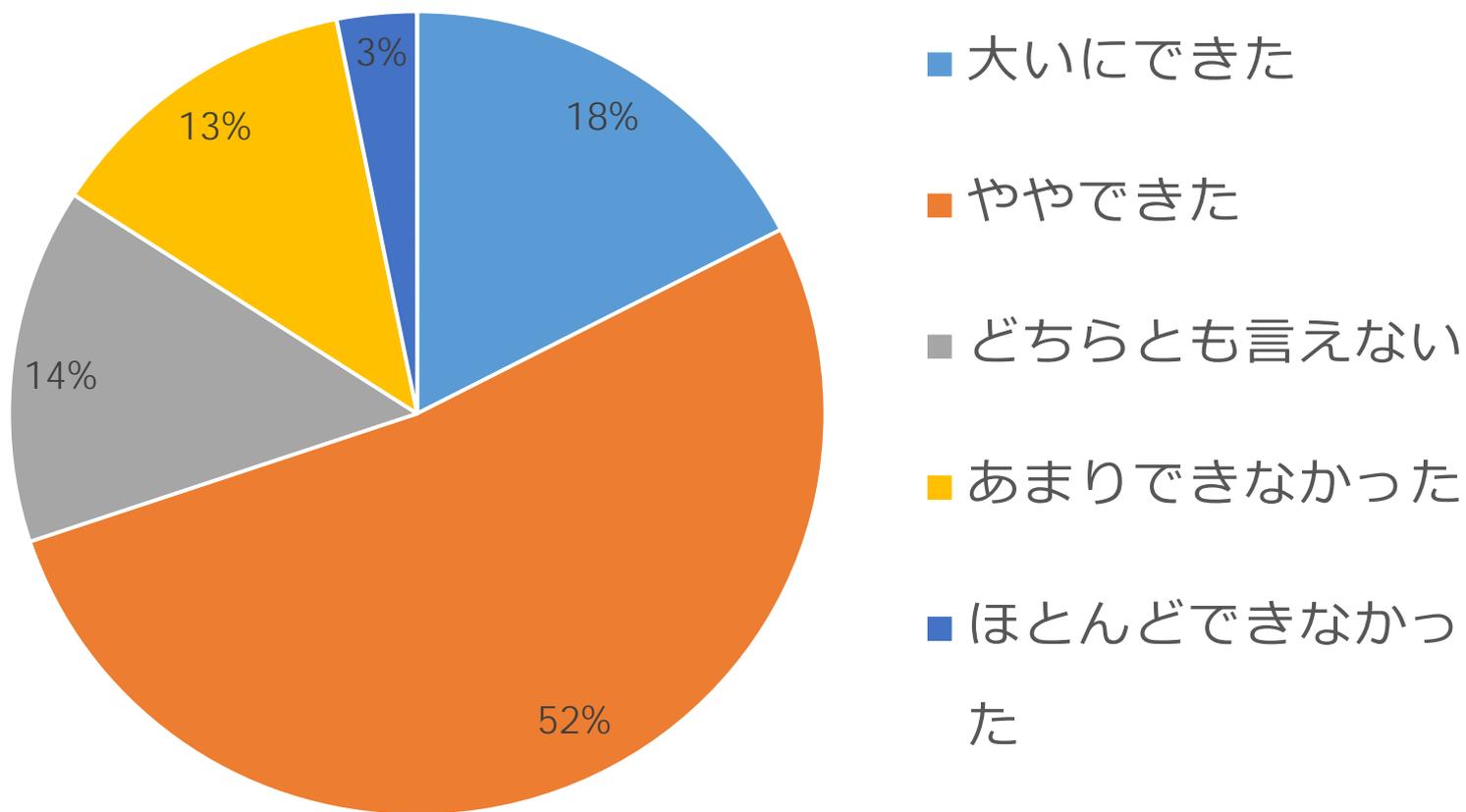
Q4. 英語を使って十分な コミュニケーションはできました か？



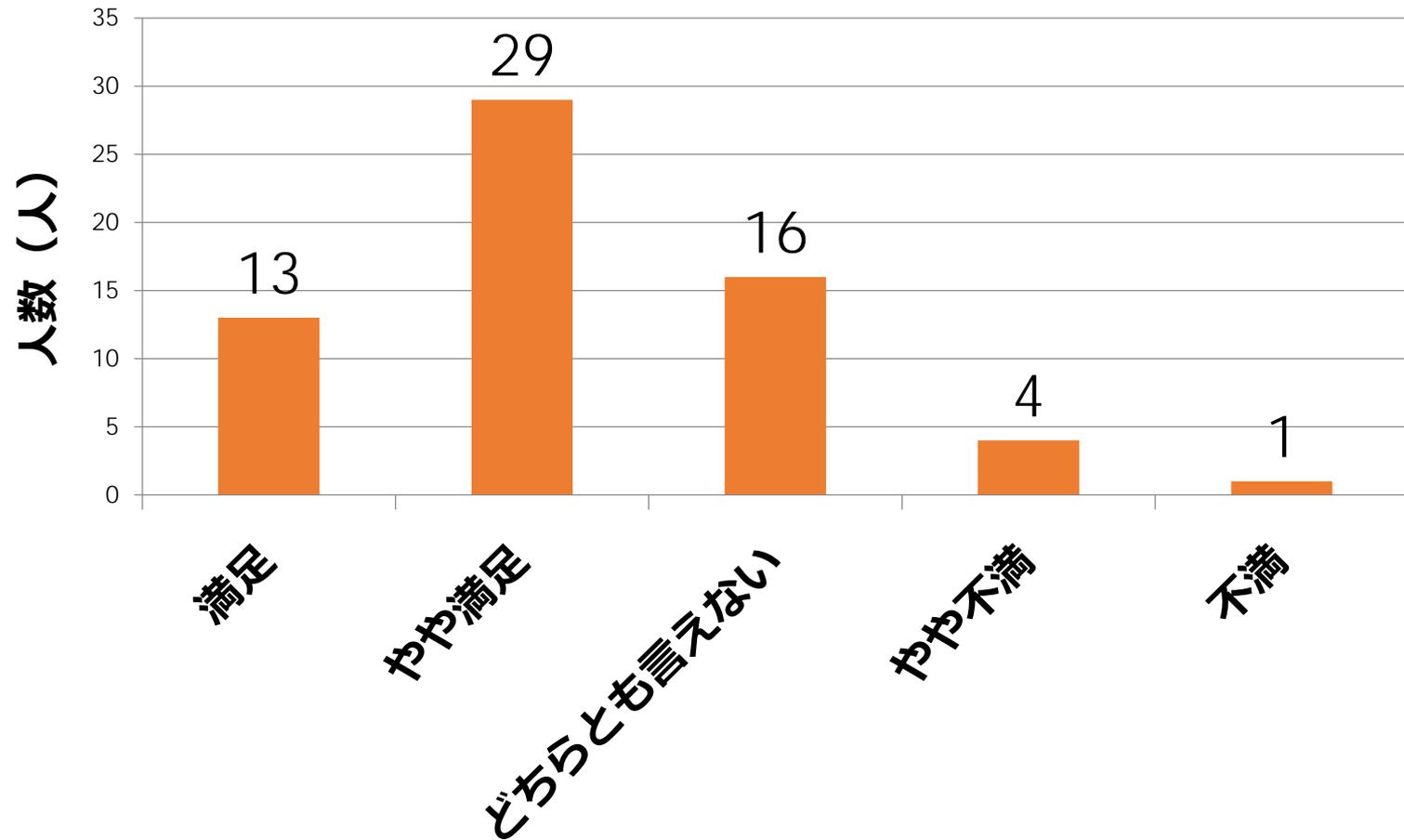
Q5. 自分の研究や考え方をほかの分野の人に知ってもらえましたか？



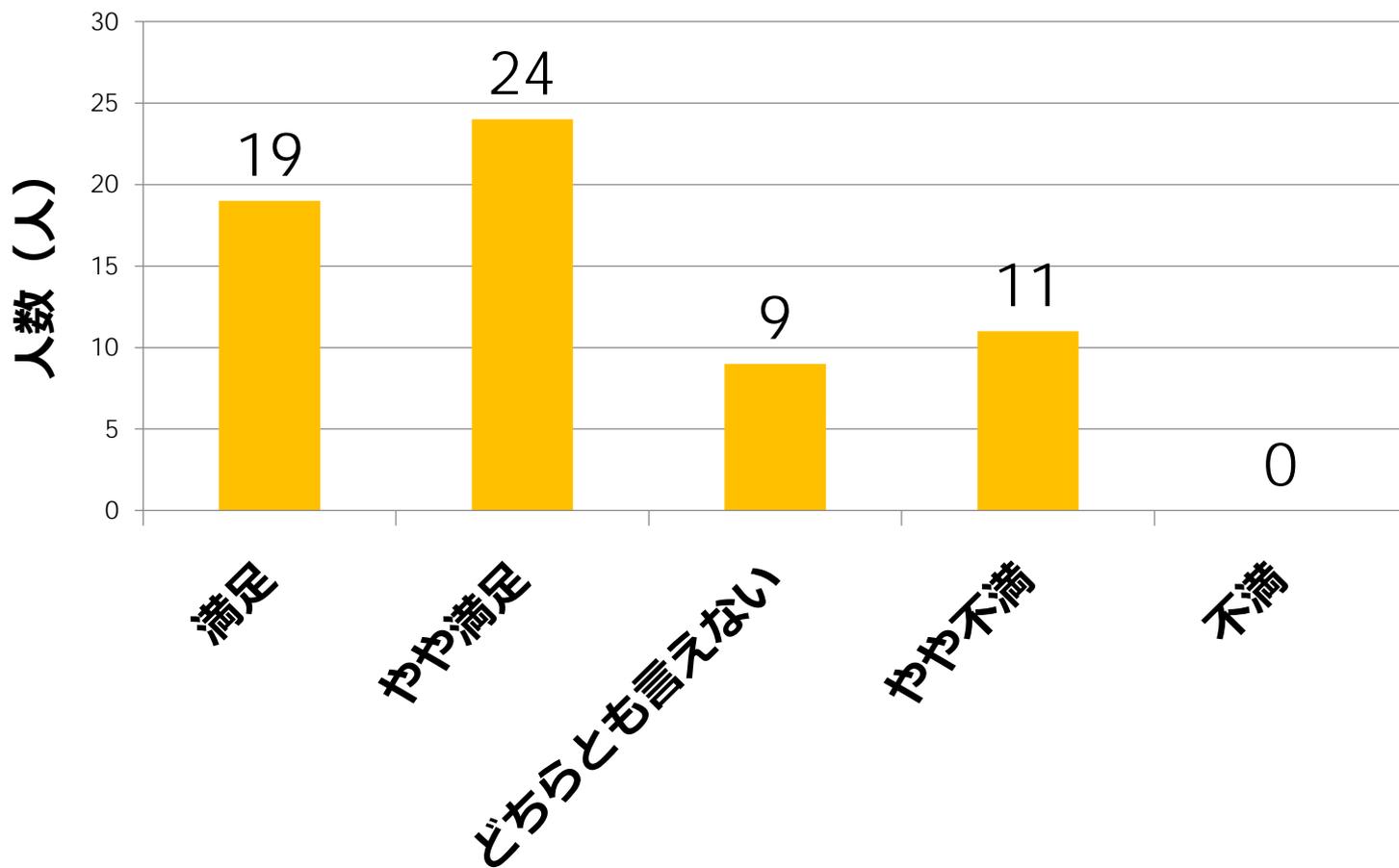
Q6. さまざまな分野の人と交流することはできましたか？



Q7. ポスターツアーについて内容と時間配分は満足のいくものでしたか？（63人）

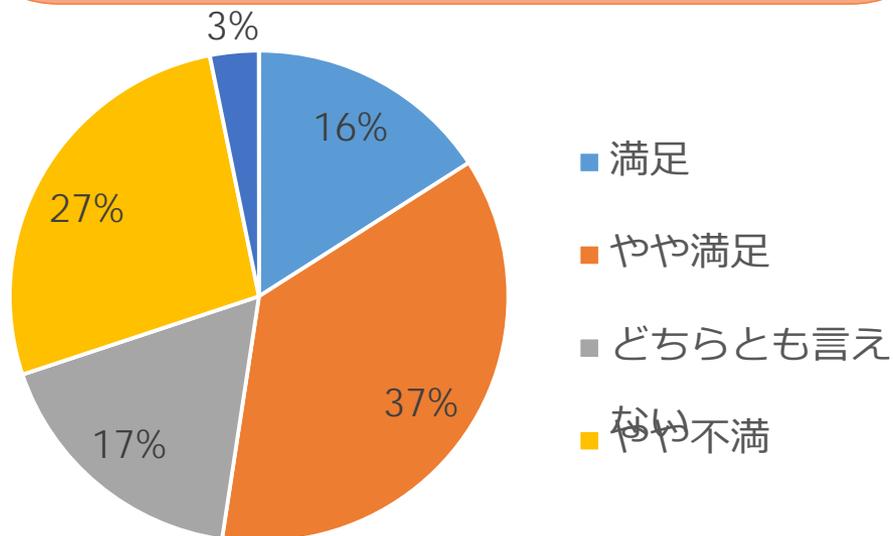


Q8. ポスターセッションについて内容と時間配分は満足のいくものでしたか？（63人）



Q9. グループディスカッション

- ・ 抽象的すぎて難しいと思っていたけど、その方がいろんなことを考えられて面白かったと思う。
- ・ ブレストなど、ディスカッションの進め方を示してくれたのは良かった。
- ・ Discussionが盛り上がりとても楽しかった。
- ・ 少し聞けるようになった気がする
- ・ got a lot out of discussion with Japanese student



- ・ 課題が自由すぎた。
- ・ もっと英語を向上させる必要があると思った。
- ・ ブレインストーミングが手法として好きではない。もっと自由に話し合わせてほしい。
- ・ 時間がないので、もっとテーマを明確にした方がいいと思います。
- ・ スライド&発表原稿を作るのが大変だった。もう少し準備の時間がほしい
- ・ a bit too long, maybe 2 topics in 2 sessions would be nice
- ・ group members didn't want to speak English, no discussion at all

Q10. 特別講演① 築山先生

どちらとも言えない

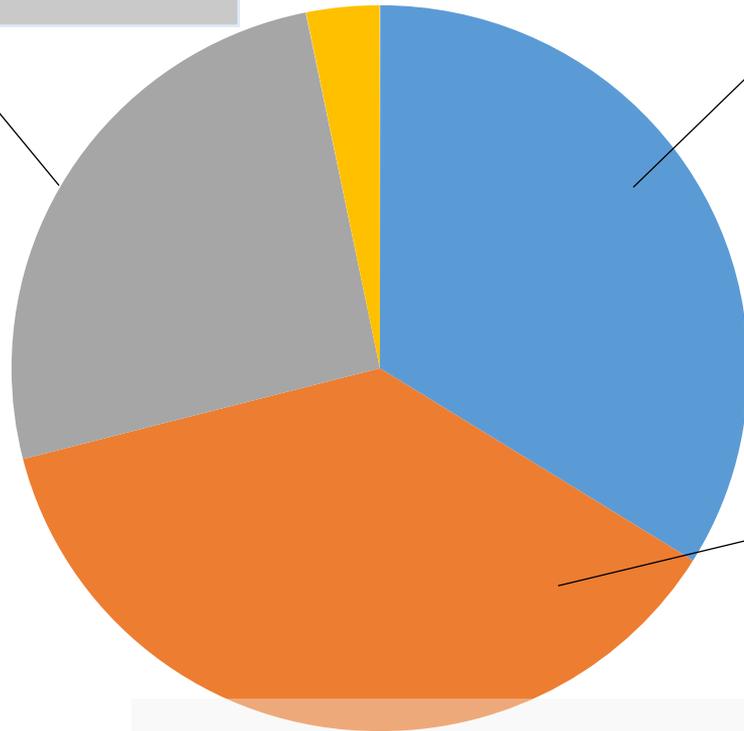
- M1専門外には難しかった。
- M1できたら学生のと時の話もしていただけたら嬉しかったです。
- M1少し長い
- M1バックグラウンドが違い過ぎて英語でわかりにくかった。
- Ph.D Didn't understand from his lecture

満足

- M1クロマチンについてあまり学ぶ機会がなかったので興味深かった。
- D2連日学生とともにすごしていただけたから。
- M1英語の発音がうまく、聞きやすかった。

やや満足

- M1序盤から分かりやすく説明してくれたため。
- M1内容が所々難しく感じた。
- M1海外での研究者としての話を聞いてよかった。
- M1自分の研究につながる分野があり、ためになった



■ 満足 ■ やや満足 ■ どちらとも言えない ■ やや不満 ■ 不満

Q10. 特別講演① 築山先生

やや不満

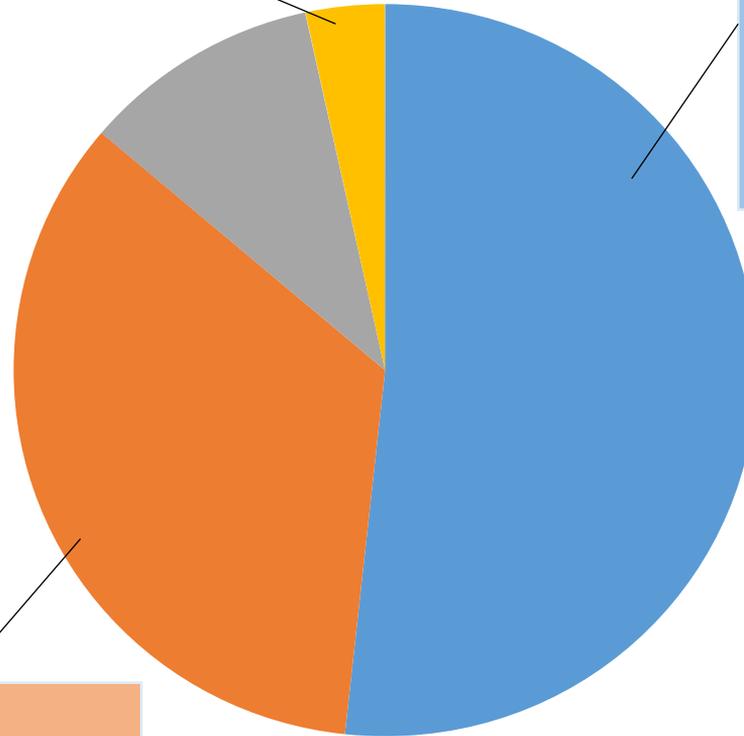
- M1女性のお風呂タイムとかぶってて、ほとんど聞けなかった。

満足

- M1海外ポスドク大学院の入り方が知れてよかった。
- D2具体的なinterviewのスケジュールなども話して下さったのが、とても参考になった。
- D6very interesting, and he was a lot of fun to speak with after words
- D3Interesting learning experience

やや満足

- M1アメリカでの研究の仕方が知れてよかった。
- D2 Good summary of research in USA
- D2 Useful



- 満足
- やや満足
- どちらとも言えない
- やや不満
- 不満

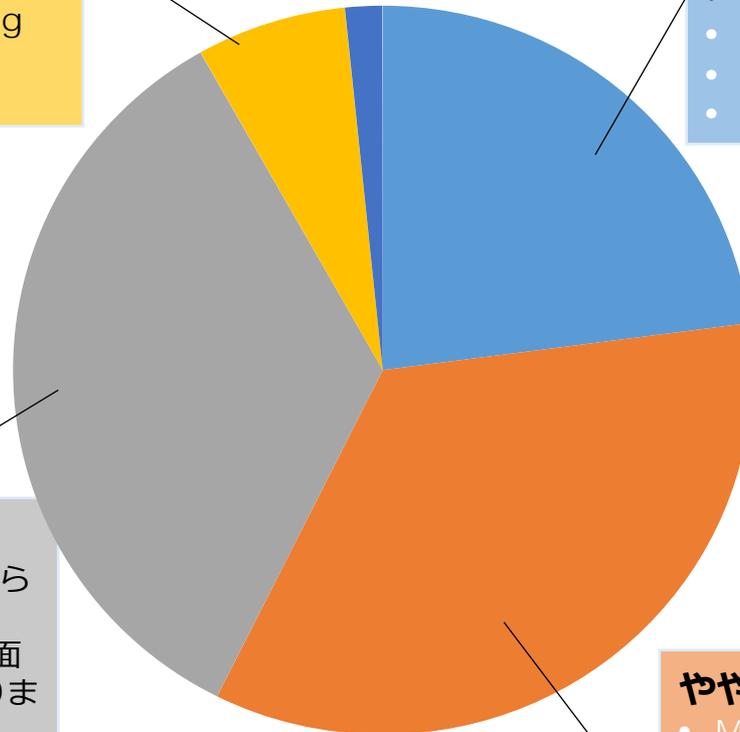
Q12. 特別講演② 長沼先生

やや不満

- D1 Too long, the topic could have been explained in half the time.
- D2 Hard to follow, but interesting topic
- M1 Too long

満足

- M1 地球外生命体の可能性について非常に興味深かった。
- 大きなスケールの話で興味深かった
- M1 分野外でもとっつきやすい。
- M1 Unique topic, very interesting!
- D3 good! informative



- 満足
- やや満足
- どちらとも言えない
- やや不満
- 不満

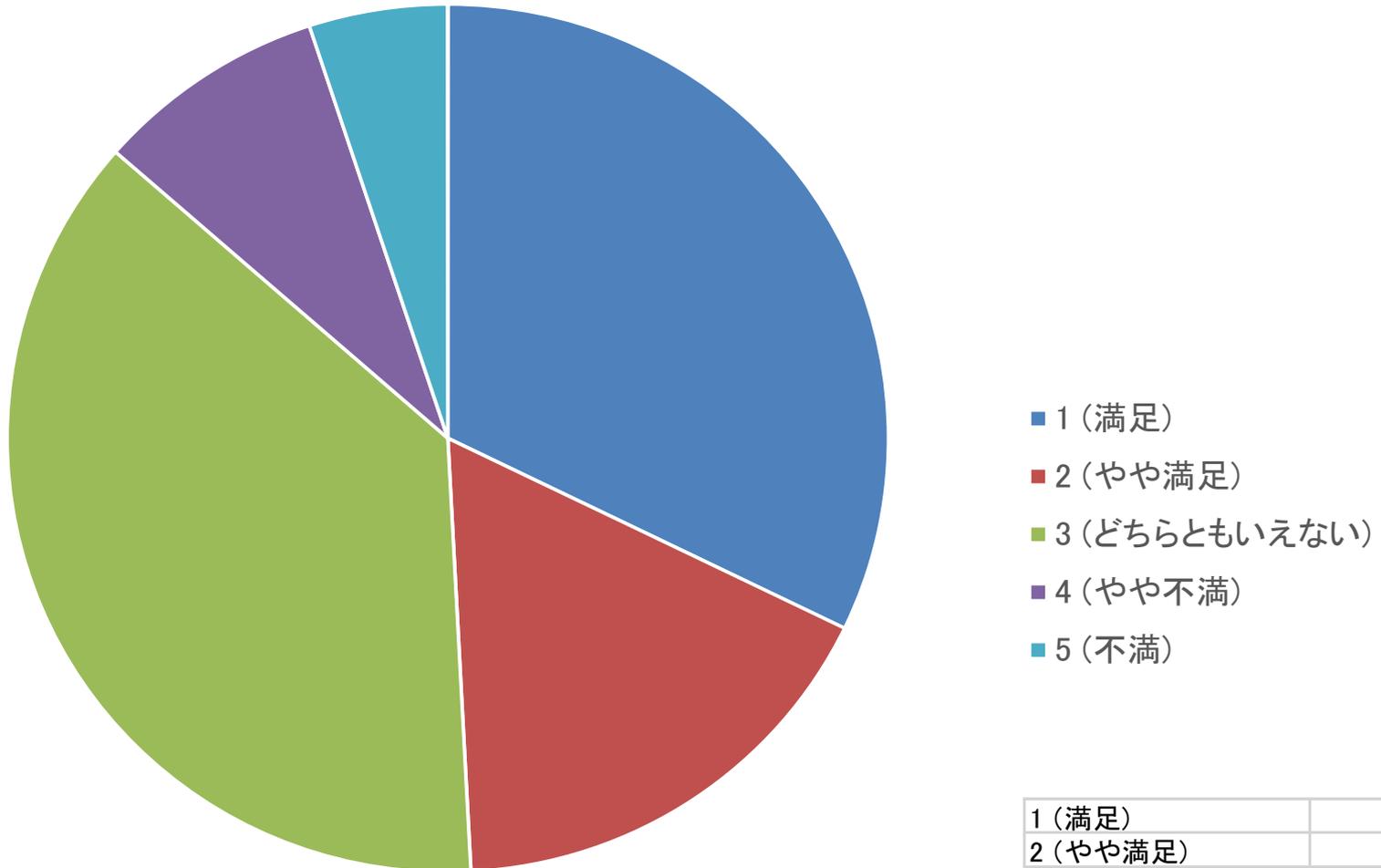
どちらとも言えない

- M1 全くの異分野だったので、わからないこともあったが、楽しかった。
- M1 惑星の話、生物の話、それぞれ面白かったですが、つながりがわかりませんでした。
- D2 大学院生向けの藩士を聞いたかった。
- M1 英語が聞き取りにくかった。
- Good presentation, hard to focus
- M1 Interesting lecture, but maybe at an unfortunate time.
- Ph.D Too long, but very interesting

やや満足

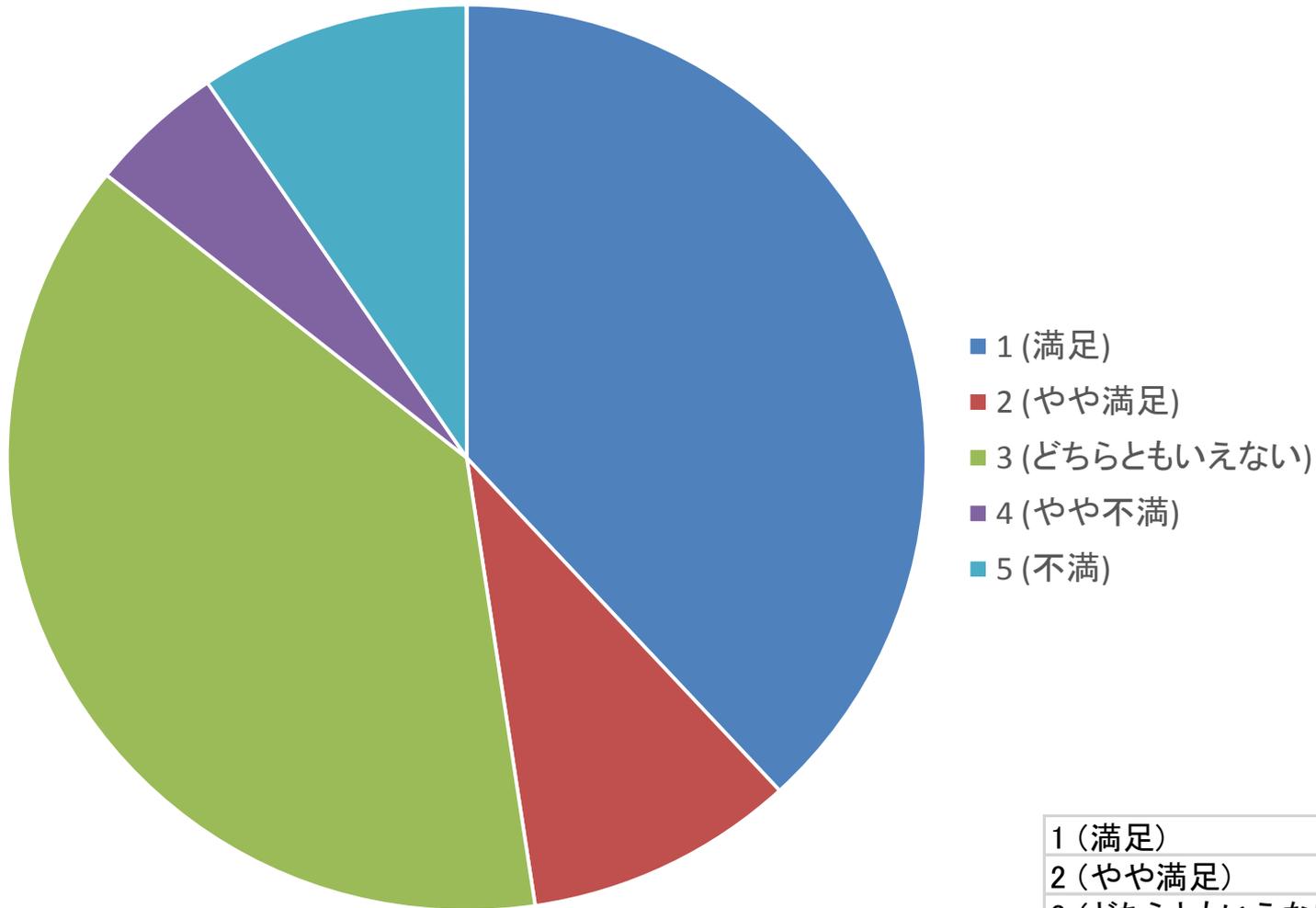
- M1 興味深かった。しかし、朝なので結構眠たかった。
- M1 異分野だったので興味を持てた
- M1 日本語のスライドもあってわかりやすかった。
- M2 1時間半フルで聞くのはツライ
- D6 Interesting, but a bit long

Q13. エクスカーション (日本人)



1 (満足)	19
2 (やや満足)	10
3 (どちらともいえない)	22
4 (やや不満)	5
5 (不満)	3

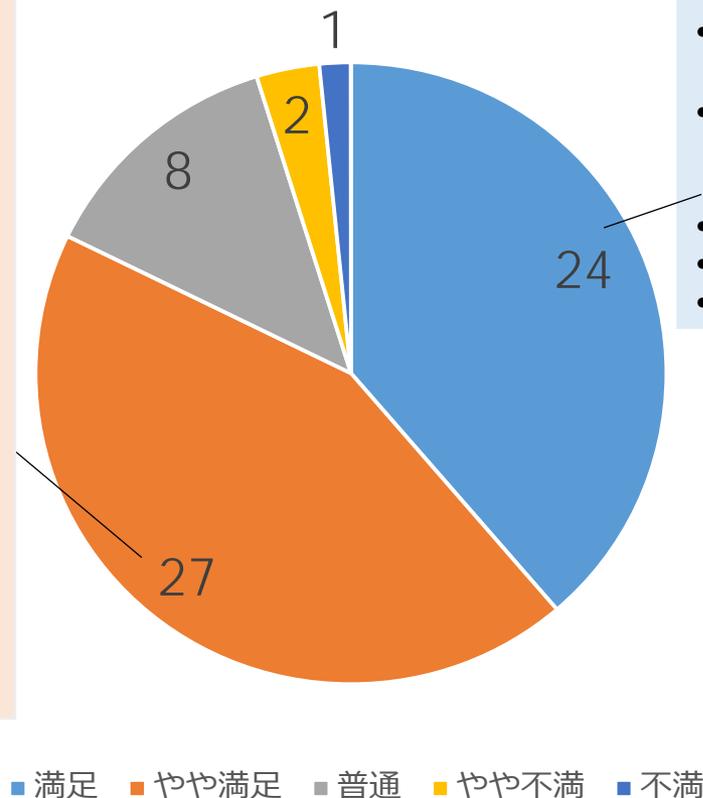
Q13. エクスカーション(外国人)



1 (満足)	8
2 (やや満足)	2
3 (どちらともいえない)	8
4 (やや不満)	1
5 (不満)	2

Q14. 全体の合宿の満足度

- 英語でのコミュニケーションは難しかったが、多くの外国人の友人を作ることが出来て満足している。最後のグループディスカッションの発表が心残り。
- BBQしたかったです。
- 他分野、他研究室の研究の話や、意見を聞いてとても有意義でした。英語で研究のことを話したことがかなり少ないので、話す機会をいただけて勉強になりました。
- total的には良かったと思う。
- みんなや外国の人との交流が密に出来たと思う。
- 夜が楽しかった。
- 英語にたくさん触れることができた。
- very nice
- very nice! But I was expecting more PhD student and maybe postdocs.
- great experience!
- It's good



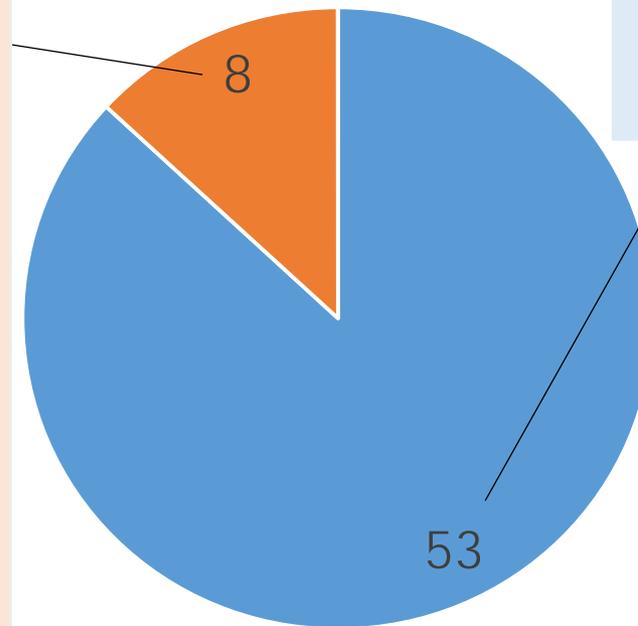
- すばらしいと思う
- 普段出来ない経験が出来た。楽しかった。
- 有意義かつ楽しいものだった。
- 英語でいっぱいしゃべれました。
- 他の国の人や友人とさらに仲良くなれた。
- 楽しかったです。友達増えました。
- Fantastic retreat, great opportunity. Would highly recommend
- very well organization!!
- No words needed
- Awesome!

Q15. 全体で論じたいグループディスカッションのテーマは何ですか？

- もう少し簡単に答えが出そうな課題
- なぜ人は学ぶのか。人種文化の違いなど
- 未来の科学技術について、今ある手法を応用する形で（夢物語ではなく）具体的に語りたい。
- 抽象的な方がいいかも知れない。
- 融合研究について
- もっとわかりやすく。
- 研究の進め方。
- 融合研究を進める上で、理解しなければならぬこととか。
- 未来をとるべきか、現在をとるべきか。
- 大人ってなに？
- What porpus to study
- 日本の良さ、分化の違い、News になっていること。
- 異分野の融合（いろいろな分野の人が集まるので）
- 自分たちが現実世界の問題に対してどれだけ貢献できているか。
- rime travel 出来たら何がしたい
- 未来に向けて研究者に何ができるか
- 科学の今後の発展について

Q18,19. 現在の合宿スタイルを変えるべきか

- この合宿が異聞や研究の交流を目的とするならば、もっと情報・基礎工の生徒を招待しなければならない。
- 雨のときのエクサカーションなど
- 自己紹介の時間をもっと取るべき
- 参加しにくい空気
- スケジュールがタイトなので、もう少しゆっくりする時間がほしい。
- 異分野領域の人々、海外の人々、あらゆるバックグラウンドの人が来られていたが、触れ合う時間があまりなかった。互いを知り合うイベントが必要だと感じた。
- maybe can invite some professors
- 初日からスケジュールがつまりすぎている。



■ このままでいい ■ 変えたほうがいい

- 大変楽しくて、発表の機会や英語を用いてコミュニケーションをとるいい機会でした。運営をしていただきありがとうございました。
- でももう少し日本人ドクターの人がいたらいいかも
- not overall, but some aspect maybe yes.

Q20. その他、ご意見があれば

- 本当にお疲れさまでした。とても楽しかったです。語学が余りになくて、あまりコミュニケーションはとれなかったのが残念でしたが、もっと英語を勉強して来年また参加したいです。
- 企画、運営お疲れさまでした。天気以外、非常に満足の内容でした。色々見直すところを掴めたので参加してよかったです。
- 楽しい時間を過ごすことが出来ました。英語を使用する良い機会となりました
- 休憩時間を少し増やしてくれたら、嬉しかったです。
- 本当に得るものがたくさんありました。ありがとうございました。
- 年に数回あれば。。。大学内でも良いので。
- 運営して下さった皆様、楽しい時間を作っていただき、ありがとうございます^^
- 来てよかった。
- 運営委員の皆様お疲れ様です。ありがとうございました。
- Great retreat, wouldn't change much.
- great thanks
- it was amazing experience!!
- overall it was great! Meeting new people with different background it's really useful and fun
- thanks to the organizes.
- recruit more senior students and postdocs who have more data to discuss
- I think the service of committee is very good. Thank you
- have it twice a year!
- thank you
- Good job!!